

## 『言語の意味論的二元性と統辞論』 刊行にあたって

編者代表 外国語学部 片岡喜代子

本書は、神奈川大学言語研究センター共同研究グループ「節周辺部の構造、素性の普遍性と個別性」(2013-2015年度代表:佐藤裕美)のこの3年間にわたる研究成果をまとめたものである。当グループは、言語の普遍性解明を目指す言語理論のもと各個別言語の相違を追求するという目的で、16年前に神奈川大学言語研究センター内に立ち上げた「対照言語学研究会」を母体として研究活動を続けてきた。まさに言語研究センターとともに歩んできた研究である。

言語表現の一つの単位である文は、その核をなす命題と、その命題の周辺要素から成る。時制やアスペクト、作用域、様相等に関わるのが、周辺要素であり、各個別言語の特徴が現れ多様性が最も顕著に確認される部分でもある。その周辺要素が、命題構成要素と如何に関わり、その働きが命題が成す節構造に如何に反映されるかを探り、更には文レベルで与えられた構造と意味が、文脈における発話として如何に働くかも視野に入れた研究を行ってきた。

その研究そのものに終わりはないが、現時点での成果をまとめるべく本書では、時制やアスペクト、格素性の付値、数量詞解釈、否定現象から見た周辺部構造のあり方、そして疑問を含む文末助詞による命題態度表明などを、日本語・英語・中国語・スペイン語を材料に論じている。執筆は本

学で教育に携わってきた相原昌彦、片岡喜代子、加藤宏紀、佐藤裕美、辻子美保子、武内道子と上田由紀子(執筆時秋田大学、現山口大学)による。それぞれに教育・学内業務の合間を縫っての研究活動であり、時間のやり繰りが困難を極める中で研究会を行い、論文を完成させた。今回の成果をもとに、更に議論が深まり研究を発展させていくことを各メンバー望んでいる。常に暖かいご支援と成果を発表する機会を与えて下さった言語研究センターには感謝の気持ちで一杯である。今後も、「言語学」という、成果が形に出るのに時間がかかる分野を支えて下さることを切に願っている。



神奈川大学言語学研究叢書 6  
2016年 ひつじ書房